

歯科外科医シュバリエ・ラスピーニのビジネス

水谷惟紗久

日本歯科新聞社

18世紀半ば、イギリスに現れたdentistの中に歯科外科医(surgeon-dentist)を名乗る人々がいた。のちに、この名称は、歯科医師の資格を表すものの一つとなっていくが、その最初期に現れた人物が、シュバリエ・バソロミュー・ラスピーニ(Chevalier Bartholomew Ruspini: 1730-1813年)である。イタリアで生まれ、ベルガモの大学で外科医学を修めたと自称し、1752年にイギリスに渡った。はじめ、バス、ブリストルで活動し、1766年以降は、ジョージ三世の母に当たるAugustaの支援を受けてロンドンに移ったとされる。そして、1787年からは、皇太子付きの歯科外科医となった。

彼はフリーメイソンとしても事績を残し、1762年にブリストルのブッシュロッジに加入後、ナインミューズロッジ(1777年)、プリンスオブウェールズロッジ(1778年)を設立。1788年には、Royal Comberland Freemason's Schoolを設立。のちに、孤児となったフリーメイソンの女子向けの学校となった。

現在に伝わるラスピーニの主著は、『歯の論文』A treatise on the Teethで、1767年、あるいは1768年に初版が出ている。ここには、同時代の解剖学者であったジョン・ハンター(John Hunter)からの引用も見られ、当時の医学水準に見合った一般的な概説書の形態となっているが、1797年の第八版を見ると、彼の販売するティンクチャーを宣伝する広告的な内容が述べられており、さらに、後半には、『非凡なるStypticの効果についての要約』(A Concise Relation of the Effects on an Extraordinary Styptic)なる、止血法を推奨するパンフレットが付属している。6ペンスという安い価格で頒布されていたことから、本書が、商品宣伝の目的を併せ持っていたことがうかがえる。

彼は、歯科医師というよりは商人に近い業態を持っており、Stypticや、ティンクチャーは、幅広い社会階層の人々に売られ、用いられていた。『歯の論文』に載せられた症例には、東インド会社の社員、軍人、婦人などの使用例が書かれ、『要約』に載せられた使用者からの推薦状には、弁理公使外科医、船乗り、肉屋、煉瓦職人、大工などが書かれている。推薦文の内容は、いずれも「動脈を切断したものがたちどころに止血し、跡形もなく治った」とするようなものであって、信用に足るものではないが、当時、このようなパンフレットの文言が、消費者にとってほとんど唯一の情報源であったと言ってよい。これらの商品は、Pall-Mallにあるラスピーニの家でも買えるほか、代理人を通じて頒布され、大西洋、インド洋航路のキャプテンも販路に含めていた。

彼は、医療サービスを提供することよりも、歯みがき粉、ティンクチャーなどを広範に売る人であった。19世紀半ばになると、歯科医師の専門性も確立されるようになり、教育、資格認証の社会システムが整えられるが、dentistという職業の最初期に当たる18世紀においては、このような事業家的、あるいはニセ医者的な宣伝をする人物が少なくなかった。初期の歯科医師は、社会の上層に属する人々に対して、抜歯、矯正、クリーニング、補綴などのサービスを行うほか、社会の広い階層に対しては、今で言うセルフケア商品の販売という形で接点を持っていたものと考えられ、その典型的な例がラスピーニであると見なすことができよう。